

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日発刊  
平成二十四年六月一日発行  
第百十五巻第六号

# ホトトギス

六月号



## 俳句随想 〔三百六十〕

汀子

天地有情の通信欄には色々なご意見を頂き嬉しく思っている。それは私へのお励ましとして有難く受け取っている。

「風邪を引かぬよう、転ばぬよう、疲れたと思ったら無理せぬように。」とある。また「天地有情を見ていると何かしら協力している方々とか、身近の句会に出ている人達が主として上欄に記載されているような気が致します。これだけ多ければ選者の気分だけで順位が動かない感じです。多謝」とある。さて、毎月「天地有情」の選句が済むとほっとする。ホトトギス社で届いた順に纏めて送って来た句稿をどんどん選句して、ホトトギス社へ送り返さなければ一月はあつと言う間に過ぎてしまう。油断出来ない。その順番を決めるのは殆ど拝見する順番という事になる。この句は出来たら上位に置いて、早く皆様に見て頂きたい場合のみそのようにして来た。殆ど来た順番なので大体顔触れが揃ってしまふのだろうか。しかし、これからもどのような掲載順にしていくか、ともかく一月という短い時間の中で「天地有情」の選をするのである。皆様もどうぞ隅から隅まで読んで鑑賞して頂きたい。

命の限り私の勉強の場「天地有情」の選句を大切にしていきたいと思っ  
ている。

# 旬日記 汀子

平成二十三年六月四日 菅屋ホトギス会

快方と聞く消息の明易し  
伊予の旅椎の花咲く頃に又  
勝馬も負馬もなく応援す  
椎の花匂ふ風向ありにけり

六月五日 下萌句会

殺象を見かけぬ時代怖れけり  
梅雨入りと聞くより晴もそれらしく  
飢餓時代殺象さへもなつかしく  
沼に浮く姫の化身の杜若  
予定又中途半端で終る梅雨

六月六日 ロイヤル俳壇

六甲山消し黒南風の至りけり  
壁に張りつきしは蜘蛛の威なる脚  
蜘蛛に留守頼み月曜日の外  
夜の蜘蛛の居座りをりし朝かな  
一変の景色となりし袋掛

六月九日 清交社

五月晴入れ替りたる月細し  
蛇見かけざりしは地震の頃よりと  
万緑の塊として山を見る  
見かけたる蛇を結局見とどけし

六月十日 工業倶楽部

青芒命の勢ひとどまらず  
湖の色まどふ玻璃戸の火取虫  
雲払ひ月を沈めて青嵐  
高原の風をとどめぬ青芒

六月十一日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会

万緑をつなぐ万緑たなづく  
たもとほる由良の流れの露涼く  
梅雨晴ともう言へさうな露涼かな  
時鳥遠音をそれと聞きしより

六月十二日 北近畿ホトギス俳句大会

雀蜂一匹にかくたぢろぎぬ  
露涼し句碑に二年といふ月日  
一山の涼しき出会ひありし句碑

六月十四日 大阪倶楽部

入梅にかけがへのなき晴一と日  
蜘蛛の囲の主の姿の無き如く  
藤椅子を軽々と席ととのふる  
明るさに騙されまいぞ梅雨に入る  
山荘の藤椅子にはや半世紀  
蜘蛛よりも逃げ足早き女かな

六月十四日 綿業倶楽部

南天の花日溜まりのあるところ  
地味かとも派手かとも南天の花  
歸路の雨うべなふことも梅雨の旅  
自ら梅雨入りの旅でありしかな

六月十五日 夏潮句会

そよりとせざる大樹に梅雨の月  
合歓の花咲き増ゆる午後集ひけり  
初夏の花とて咲く日待つジャランダ  
被災地へ支援きまつた露涼し  
きざはしを登りまつたる梅雨の月

六月二十日 アサヒカルチャー

梅雨雲を抜けるとき揺れ着陸す  
教室に梅雨の暗さを持ち込まず  
梅雨逃れ来し教室の明るさよ  
六月二十一日 有恒俳句会  
月上げて色失ひし紅の花

庭師には目こぼしならぬ竹落葉  
被災地に残る彩り紅の花  
幾度も光返して竹落葉

六月二十一日 無名会

紫陽花に足したき色のなかりけり  
屋の月渡る空あり七変化  
又今日の梅雨に明けたる朝かな  
その後のことを問はばや明易し  
梅雨らしくなき午後の晴たまはりし

六月二十三日 きとろぎ会

香を閉ざす月の鈴蘭原野かな  
鈴蘭の野をゆるがせし朝の地震  
雲切れし月の零せし雨蛙  
降りて止む梅雨の変幻自在かな  
青空の降らせる梅雨でありしかな

六月二十四日 時雨句会

蜘蛛の囲の吹かれて月に濡れそぼつ  
蜘蛛は囲を張りて所在のなかりけり  
花蜜柑香を閉ざしつつ月を浴び  
蜘蛛走る壁残像の大ききよ  
被災地にせめて鱈の漁を待つ

今瀬剛一様主宰「対岸」二十五周年祝句

露涼し四半世紀のかがやきは  
刻々といへる努力の涼しさよ  
やりくりは時間にもあり五月晴

六月二十五日 句会と講演の会

改めて父の日らしき過ごし方  
災害も人事ならぬ南風吹く  
六月二十七日祝「三枝かずを」ふみ代句集  
さしのべし手に尽きるなき泉汲む  
六月二十七日 祝「田鶴」五百号  
ふり返る日々なつかしき盆の月

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十三年六月一日 カトリック新聞選者吟

新樹の香纏ひ追悼ミサの席  
六月一日 とある佳人への結婚祝

父の星涼しく華燭見下しぬ  
六月二日 蕉心会

雨宿りめく六月の蕎麦屋かな  
明易し又明日からは旅の日々

梅雨憂しと思ふ心を流しけり  
五月雨に池整うて来りけり

この雨を脱ぎ捨てて万緑となる  
館に向く枝の彩り山法師

栗の花匂うてよりの館親し  
五月雨を真珠の如く葉に留め

六月三日 岡崎ホトギス会  
搦手の薄暑集まる一とところ

万緑に城攻められてをりにけり  
川幅といふ涼しさに佇めり

六月四日 芦屋ホトギス会  
燕の子とは口開けるのが仕事

椎の香に山膨らんでゆきにけり  
六月五日 野分会 芦屋例会

ついでりして町の暮しの重くなる  
入梅といふといへどもこの陽気

はんざぎの水惑星の騒きかな  
はんざぎのジュラ紀を語る背中かな

六月六日 はせを句会

ついでりてふ鴉の高さありにけり  
能涼し闇司る面かな  
六月九日 土筆会

虚子館の未央柳の色孤独  
花菖蒲今日が見頃といふ出会ひ  
六月十日 六甲会

街の景田植の景へ移る窓  
八号車七番D席景田植

日帰りの旅田植前田植後  
敷島の国の田植に神宿る

朽ちるには非ず河骨水になる  
朱に錆びてゆく河骨の最期かな  
六月十日 虚子記念文学館投句

深川正一郎展を蚊と共に  
六月十一日 北近畿ホトギス大会

露涼しこんな景まだあつたんや  
日本の原風景の里涼し

日差得て屋根万緑の一部分  
味があると言はれし文字の句碑涼し

濡れ色に句碑を鎮めて五月闇  
水音に目覚め始めし雪の下  
六月十三日 朝日カルチャー 若草句会

藻の花を咲かせ茅葺屋根の里  
薫風に押し上げられてゐる都心

水の香を遠ざけてゐる花あやめ  
風薫る三角ビルの一辺に  
はんなりとこいさん薫風と来はる  
六月十六日 登高会

館一步未央柳の明るさに  
癒されてゆくその君の白服に

白服に色気失せゆく女かな  
虚子館の未央柳に触れ駐車

六月十日 百夜句会

五月闇二人の恋を消してゆく  
黒南風に銀座の路地を明け渡す

未央柳君の視線に錆びゆけり  
六月二十日 草木瓜会

父の日や恋を忘れてをらぬ父  
父の日や散々女房泣かせ来し

著我豊黄色い風の音となる  
六月二十日 日里学園句会

君を待つ心 鵜舟を待つ心  
先づ吾子が潜りてよりの茅の輪かな

鵜飼果て水惑星の眠り初む  
跳ぶやうに茅の輪を潜る女の子

今年竹そよぎて東山動く  
鵜飼火の点となりゆく静寂かな  
六月二十四日 浅井青陽子様御舞儀

百年は長し短し露涼し  
六月二十五日 ホトギス社句会

南吹くたつのの里に人溢れ  
百寿翁南風の中を送らるる

父の日や天寿全うせし人と  
六月二十六日 野分会 東京例会

はんざぎのやうな体であらまほし  
入梅もあるさたまには人生も

空降りてくるおりてくる梅雨に入る  
六月二十八日 若水句会

さくらんぼ君とは短かつたよね  
さくらんぼ本当にこれではないです

竹落葉西へ行くなど言はれても  
螻蛄動くより水動く空動く

優しさとは何だらうさくらんぼ食む  
シユトラウス洩れ来る庭の竹落葉

# 雑詠

## 廣太郎 選

学ぶとは厳し正月とてなき子 朝倉 井上醇女  
 喪心に暮らす子の家三ヶ日 同  
 新生のところに眺む雪景色 同  
 咲きかけし散りかけしまま冬薔薇 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 その中の真紅もつとも冬薔薇 同  
 冬薔薇咲き切る力秘めながら 同  
 恐れれば形となりぬ雪女 袋井 湖東紀子  
 真白な闇より生まれ雪女 同  
 まだ冬日あふるるのみの新居かな 同  
 おみくじの雪より白く結ばれて 柏 田丸千種  
 茶店の娘また湯気立の水足しに 同  
 寒雀忍び返しにうづくまり 同  
 雪原といふまつさらな大地あり 米子 中村襄介  
 雪男よりも遇ひたし雪女 同  
 雪纏ひオブジェをなせる森の木々 同  
 恩寵のごとくに泉クリスマス 熊本 岩岡中正  
 たつぷりと眠りて年を逝かしめん 同  
 綿虫によはひ一つを重ねけり 同

地球てふ発射台なる霜柱 東京 橋本くに彦  
 空見上げ鳩くくくくと寒の水 同  
 恋猫の恋路の闇をまつしぐら 同  
 野の色に譲り譲りてゆく斑雪 香川 湯川 雅  
 風冴ゆる隙間だらけの光かな 同  
 寒風へ寒風に追ひ返されし 同  
 大阪の風忙しなきとんどかな 神戸 山田佳乃  
 眉つつと上げて初髪てふ気品 同  
 淡海の余白片寄せ鴨の陣 同  
 句道楽二月礼者として集ふ 奈良 古賀しづれ  
 酒蔵といふ春寒の闇匂ふ 同  
 水の神田の神目覚め犬ふぐり 同  
 春浅し浅しと紡ぐ水の音 神戸 立村霜衣  
 鍵盤といふ春寒に触れにけり 同  
 問うてゐる余寒答へてゐる震へ 同  
 卒寿なほホ旬の未来や去年今年 福山 竹下陶子  
 振りこぼす巫女の神鈴淑気あり 同  
 日脚伸ぶ天の目盛を繰る如く 同  
 天狼星青き光にある余寒 神戸 涌羅由美  
 速報の地震の字にある余寒かな 同  
 電飾を纏ひ眠れぬ大冬木 同  
 風花に空は明暗くり返し 八尾 山下美典  
 こつ要りて力要らざる独楽廻し 同  
 臘梅の日ざしのありてこその色 同

# 雑詠句評（五月号より）

千鶴子・美奇・静龍

眞理子・中正・葉

保佳・憲明・むつみ

とほ歩・廣太郎

## 京の筆濡らす若水ひとしづく

神戸

藤井啓子

いわゆる「はんなり」という言葉のふさわしい一句。京都の筆は、やや細身と聞いたことがある。なべて無骨な我ら東夷と違いたおやかな雅の京の筆。年の初めに汲む若水で墨を磨り、流れるように美しい文字を書く。若水はまず一滴。「濡らす」といい、へひとしづく」と言い、美しいひびきの言葉をあつめて、はんなりした一句を仕立てあげた。作者はこのムードを表現したかったのであらう。（千鶴子）

何とも雅な「若水」の表現である。新年最初に汲む水の事であるが、結構飲料水を詠まれる事が多い中、このように筆に染ませ

るのが、一つの発見でもあろう。勿論過去このような発想は皆無ではないのだが、何か正月気分が弥が上にも増してくるように感じる句である。（廣太郎）

## クリスマスプレゼント寝息に贈る

神戸

立村霜衣

クリスマスの前夜、子供たちに贈物を配って行くという赤い外套を着て、白い長い髭を生やした老人、サンタクロース。その代理を勤めたのはパパ。

待ちくたびれたあどけない寝顔を眺め、安らかな寝息を立てている枕元にそっと置いたプレゼント。どんな贈物だったのか。「寝息に贈る」の七文字に夢と物語が詰まっているのだ。

（美奇）

サンタクロースを信じている子供は、今の世の中どれだけいるかは判らないが、クリスマスのプレゼントは楽しみである。クリスマスイブにはちゃんと寝ていないとサンタは来てくれない、という事も言われた記憶があり、朝起きた時の楽しみである。「寝息に贈る」という感性が秀逸である。（廣太郎）

（以下略）

# 天地有情

# 花子選

いつもとは変わる座席も雛の宿  
京都 安原 葉  
雛壇の前の座席は譲られず  
同  
風に舞ふ軽さも見せて朴落葉  
東京 稲畑廣太郎  
朴落葉山の空気が変るとき  
同  
刷く雲のうす紫に初み空  
尼崎 中村芳子  
大いなる夢を糸がきぬ初み空  
同  
素直なる墨や硯やふではじめ  
神戸 後藤比奈夫  
書初の杉原紙に筆 歡喜  
同  
遺蹟の野雨にをりふし昼の虫  
朝倉 故井上弘堂  
夜半までも灯火親しと読み漁る  
同  
塩害にめげず東北稲熟る  
同 井上醇女  
通院の気分けふよく鯛雲  
相模原 木村享史  
きのふ虚子けふは芭蕉と冬籠  
同  
伴侶とは病む妻のこと冬籠  
東京 河野美奇  
余りにも急な別れや冬薔薇  
同  
悴みてただ言葉なく抱き合ひ  
同  
マフラーをしても青春かへらざる  
熊本 岩岡中正  
初雪や記憶の中の一詩人  
同

雪国の雪のたよりのただならず  
東京 今井千鶴子  
夜々星の光やはらか日脚伸ぶ  
同  
豪雪の由由しき中を寒明くる  
樞原 稲岡 長  
下萌を蹴りつつ帰るランドセル  
同  
妻ぬねば我が生立たじ冬夕焼  
徳島 上崎暮潮  
玻璃窓の眉山全容冬日和  
同  
俳磚の友へ挨拶 初句会  
吹田 宮崎 正  
身構へも気構へもなく春を待つ  
同  
立春といふにこの冷え何とせん  
川西 阪本ゆたか  
この紅梅今年一番さきがけし  
同  
二日富士箱根駅伝往路終ふ  
熱海 嶋田一步  
駅伝を見る渋滞に二日富士  
同  
芽吹きも見アカシヤ遂に裸木に  
同 嶋田摩耶子  
回転ドア一緒に入りし北風吠ゆる  
同  
小寒や慶賀の心まだ失せず  
金沢 藤浦昭代  
春のみに非ず春待つ心あり  
同  
元日の夕星ともす静寂かな  
東京 橋本くに彦  
闇といふ脇役冴ゆる六連星  
同

# 天地有情句評

汀子

書初に改まる作者ならではの心入れ。

夜半までも灯火親しと読み漁る 朝倉 故井上弘堂

命を惜む心持ちを失わない俳人として全うされた貴い命。

雛壇の前の座席は譲られず 京都 安原 葉

通院の気分けふよく翳雲 朝倉 井上醇女

雛の前という定席。

爽やかな秋の回復を祈る刻々の看取り。

風に舞ふ軽さも見せて朴落葉 東京 稲畑廣太郎

伴侶とは病む妻のこと冬籠 相模原 木村享史

大きな朴の落葉が散る時の軽さを見た。

病む妻を伴侶として看取る真摯な作者。

大いなる夢を糸がきぬ初み空 尼崎 中村芳子

余りにも急な別れや冬薔薇 東京 河野美奇

健康に天寿を全うされたご生涯。

思いがけない訃報に悲しみ深く。

素直なる墨や硯やふではじめ 神戸 後藤比奈夫

(以下略)